

CHECK!!!



**マキノキ**  
常緑高木。成長が遅く、庭木として根強い人気。平戸藩内の家垣によく使われていた。平戸の鶴山城のマキ並木は樹齢400年を超える大木だが、赤崎岳の麓にあるのも負けてはいない。



**ヤマモモ**  
成木は20mにもなる高木。幹は太くなると多数の楕円形の模様があり、灰白色の樹皮に覆われる。古くなると縦の裂け目がでることが多い。雌雄異株で、6月ごろ黒赤色の実を結ぶ。

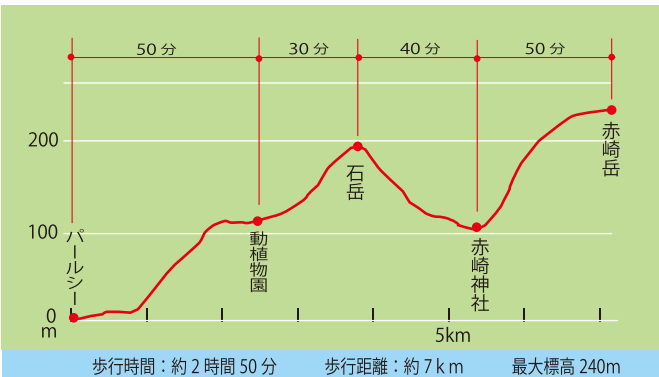


**カゴノキ**  
樹高10~15mの常緑高木。樹皮が鹿の子まに剥け落ちることからこの名前がある。森の中でひときわ目に付く。

ウォーキングメモ

佐世保港と九十九島

赤崎岳に登ると東に佐世保港、西に九十九島が見える。近代港湾都市と、太古のままの自然が同時に眺められるのだから、こんな場所はほかにない。佐世保港は明治期に海軍鎮守府の開設によって出来た。建設委員長は初代鎮守府長官にもなった赤松則良。SSKがある立神繫船池は日露戦争当時に吉村長策によって立案され、真島健三郎技師によって設計、施工された。海に突き出ている立神鼻と大蛇島、小蛇島を結んで巨大な繫船池を作ろうというもの、大正5年に完成した一大国家プロジェクトだった。蛇島は、赤崎伊予守と白縫姫の伝説がある島だ。いくつもの島を埋めてドックや埠頭が造られたのである。かつては佐世保湾内も、九十九島のような風景だったという。



九十九島の上空では春になるとツルの渡りが見られる

M 石岳から見た赤崎岳。まさに円錐形をしている。



コース4 九十九島を眺望して石岳と赤崎岳に登る

1:25,000  
国土地理院地図使用

九十九島を眺める二つの山

九十九島を望む二つの山に登ろうと企画した。まず西海パールリゾートから歩きます。石岳の裾の住宅地の坂を進むと、採石場のあとが九十九島を借景とする住宅地となっている。ここから石岳に登ればいいのだが、そうはいかないようだ。動植物園の崩治に進んで、石岳の展望台を目指した。石岳展望台は人気のビュースポットで、ハリウッド映画『ラスト・サムライ』のファーストシーンここで撮影された。日本を代表する風景ということだろう。光る海に浮かんだ島影はいつも美しい。

振り返ると、小さな富士山のような赤崎岳がある。別名、愛宕山とも呼ばれている。山裾には戦国時代、赤崎伊予守の山城があった。市街のどこからでも望める山だが、登る人は意外と少ない。道を戻ってバス通りを歩く。船越への道と合流する少し手前から、細い道に入った。神社の裏手にマキノキの巨樹を見つけた。辺りが古くからの住居地だと想像出来る。さらに辿る途中にも、ヤマモモの老樹を見かけた。幹は空洞になっていて人が入れるほどだ。

『赤崎岳登山口』の標示を見て、いよいよ登山だ。竹林がやがてアラカシやヤブニッケイの高木となる。樹皮がまだらに剥けたカゴノキがやけに目についた。斜面をジグザグに登っていくと、登山道のサクラ並木の間にSSKのドックが見えた。さ

ながら近代化遺産の風景だ。千尺の埠頭や前畑の弾薬庫など、いつもは見えない角度で佐世保港が一望できる。

途中から西の斜面に続く山道を通ることにする。鬱蒼と木々が茂った様子は、奥深い山に入り込んだ気分にする。山頂近くは大きな安山岩がゴロゴロしていた。その岩と岩の間をくぐり抜けて頂きの広場に出た。テレビ電波塔の背後に、『阿遇突智神社』があった。

赤崎岳は愛宕山とも呼ばれる。阿遇突智命(かぐつちのみこと)、別名火産靈神(ほむすびのみこと)は火の神で、愛宕神社の祭神である。これが愛宕山の謂れなのだろう。

山頂から眺める九十九島は、光に染められた縮緬のようだ。早春になると、この島々の上をツルが北上する。



J 大きな岩の間を抜ける。



K 阿遇突智神社



C 石岳には2ヶ所に展望台がある。一段下もナイスビューだ。



I 頂き近くに展望所が、ここからの風景もいい。



B 常緑高木の林が続く。



A 石岳展望台下の駐車場から登る。



D 細い道に入る。



E 少し空き地があって、ここが赤崎岳の登山口。



F まさにジグザグ縫いのように登る。



L 山頂の広場から九十九島を眺める。



H 西斜面に続く山の歩道。



G SSKが一望だ。春には桜並木がきれい。